慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会思想家としてのジョン・ラスキンの生涯（一）
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.1 (1923. 1) ,p.69- 80
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230101-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

諸物を共にし、産業と其所有を鬻て各人の用に從ひ之を分與へぬ」（使徒行傳二章四十四節四十五節）。「信者はみな心を一にし意を一にして誰一人その所有を己が物と云ふことなく凡て之を共に有り」（同上四章三十二節）。富めるは汚辱なりとせられ、貧しきは神聖なるに近きものとせられた。彼等は總て財寶に仕へ、富有を渇望するは必然的に罪に繫がる、其反對に貧窮は現世的快樂と一時的權力の棄却を意味すと確信して居つたのである。

然るに信者の數の增加と、共同體の普及と、保羅の基督教宣傳と、彼の基督教觀の弘布とは次第に共産主義の勢力を弱め、之に代えて寛大なる施與と慈善的給與とを貧しき兄弟姉妹の爲めに施用することゝなした。而して更に進みては基督教界に階級的差別すらも生じたのである。換言すれば、信者の中に富者と貧者と、雇主と勞働者との別を生じ、昔の同胞的友愛は消失したのである。此階級的對峙は「信仰」と「行」との爭に於て其理論的表顯を見出した。其著者がイエスの教義と保羅の教義とを對照さした雅各書は此鬪爭を反射して居るものである。「人自ら信仰ありと言て若し行なくば何の益あらんや、その信仰いかで彼を救ひ得んや。」雅各書は富める者が彼等の信仰に就て誇り信者の集りに於て特別なる榮譽を請求し、彼等の貧しき友なる信者に對し信者にあるまじき態度に出づること等を記し、而して「此の如く信仰もし行を兼ざるときは乃ち死るなり」と宣言するのである。彼は神が今猶ほ富者によりて凌虐れまた裁判所に曳かるゝ貧しき人を選み給ふことを想ひ起さしむるのである。故に彼は言ふ「富者よ爾曹既に來らんとする禍害を思ひて哭叫ふ可し。爾曹の財は朽ちなんじらの衣は蠹ひ、爾曹の金銀は銹腐れり、此銹證を爲て爾曹を攻め、且つ火の如く爾曹の肉を蝕はん、爾曹この末の日に在りて猶ほ財を蓄ふることをなせり。視よ爾曹が其田を獲せし雇人に予ざる値は叫び、其刈し者の呼聲は既に萬軍の主の耳に入れり」（雅各書第五章一節——五節）。

遮莫、雅各書の愁訴は之を一般化せざるを要す。基督以後の初めの三世紀間に在りては、共産主義的精神は信者の間に猶ほ旺盛であつたのである。基督教の大多數は假令羅馬帝國の法律と制度とに忍從したりとするも、彼等は其正當なるを認めんとせる者ではない。希臘及び羅馬に於ける教父は、少くとも理論上に於ては反政府的教義、と共産主義的教義とを嚴守して居つたのである。彼等は私有財産を非難し、權力、軍役及び愛國に對する國家の請求を否認したのである。

社會思想家としてのジョン・ラスキンの生涯（一）

奥井復太郎

一

Victorian Age は英吉利の發展の最高頂と見る事が出來る。此の時に於いて、更に嚴密に云へば千八百四十年代の頃からして英吉利は其の國家的發展の絶頂に達せんとした。人々が自から謳歌した所のものは國勢の進展であり又所謂社會の進歩であつた。穀物條令が廢止せられては最早英吉利に於いて自由貿易に對する反對の動因は全部なくなつてしまつて茲に自由主義の勝利が確然と樹立された。『千八百四十六年より同六十年に亙る十五年間には Whig 黨及び Gladstone は何等重大な反抗を受ける事なくし

て自由貿易主義の當然歸着す可き大建築を完成したのである。

斯くて一方では穀物條令、財政的關稅政策の廢止に依て促進された自由貿易により又他の一方では一般の世界的進運の結果として產業と繁盛の大發展を來したのである。』(G. M. Trevelyan—British History in the Nineteenth Century, 1782-1901. p. 276)

Victorian Ageの一つの主なる關係は其が、新しい社會組織が建設され又全然新しい問題も解決されつゝあつた時代であると云ふ事である、十九世紀は從つて希望の時代と呼ぶ事が出來る。....』(The Victorian Age, by W. R. Inge. p. 9)°G. K. Chestertonに從へば此の時代の大部分はミルに於いて其の最高頂に達したUtilitarian traditionが其の勢力の中心を占めてゐたし又或る意味に於いてはHuxley並びにMacaulayによつて代表された單純なるVictorian rationalismが其の中心勢力としてVictorian era其のものと解せられるのである。(The Victorian Age in Literature. pp. 38-40)

然し乍ら、斯の如き「社會の進歩」又はヴヰクトリアン合理主義に對して反對の見地に立つ者も少くなかつた。Chestertonは此の合理主義に對する反動として第一にNewmanよつて代表せらるゝOxford Movementと第二にCharles Dickensと第三に一種のロマンティック・プロテスタンティズムを形成する一團の人々即ちCarlyle, Ruskin, Kingsley, Maurice或は更にTennyson等を包含しうる一團との三つを擧げてゐる。(前掲書)

ヴヰクトリア中期の小說が當時の社會狀態を精細に描寫して社會改革の有力なる道具となつた事は何人も認めるであらう。Frederick William Roeは『當時の小說家によつて取扱はれた產業革命は其れ丈けで一つの本或は其の一章を形成してゐる』と述べてゐる。(The Social Philosophy of Carlyle and Ruskin. p. 21 and its foot note)

政治家、實業家又は經濟學者によつて國運の進展、又は社會の進歩と自讃せられた當時の社會狀態を異つた立場から冷やかに眺め、そして熱烈に之れを攻擊した人々の一人として筆者が今次に長くその生涯を傳へようとするジョン・ラスキンが在る。

新しい社會狀態を作り上げた當時の人々はW. R. Inge氏の云ふ通り多少「人類社會の自働的進歩」と云つた樣な樂觀的信念に囚はれてゐた。當時の人々が進歩、發展と有頂天になつてゐた其の裏に——或は其の直ぐ後から——吾々二十世紀の社會が解決-或は其の爲めに惱まされなければならない社會的不安が生じてゐた。この進歩、發展は一方に富と貧窮の對立を作ると共に他方に支配と隷屬との關係を築き上げて今日に及んだ。ヴヰクトリア時代の繁榮に深い解剖的な觀察を下して其の內面の疾患を剔抉したラスキンは（勿論彼が此の點に於いても其の師であつたカアライルに負ふ所は多いであらうが）此の關係に於いてProphetと稱せられ社會主義者若しくは社會主義的と稱へられ又社會改革の先達とされる。ラスキンが果して此の中の何づれの名稱に適するやは之れを決する事極めて困難であり又早急に決する要を見ない。たゞ彼が產業革命以後の社會或は資本主義的社會生活に對する有力なる批評家である事丈けは疑を容れぬ點であらう。換言すれば彼は現代文明の批評家である——明かに彼の境遇は彼をして現代文明の批評或は現社會の經濟生活の批評を爲

さしむるに適してゐた。中世的復古主義者と見なされる彼は歐維巴大陸への數度の旅に於いて明かに中世文明の美と意義とを見出し得たし又幼時の英國內地の旅行は彼をして產業革命に影響されない、農村や小都會の眞美に感銘せしめた。是等の觀察が彼の近代社會生活の批評の根底となつたのである。

二

環境を顧みずして人の性格並びにその思想を理解せんとするは甚だ不充分な企である。Ada Earland はラスキンを以つて其の周圍の影響を強く受けた者である（the victum of circumstances）とし彼の著書 Ruskin and His Circle はラスキンの初期の周圍の勢力と彼の偉大なる點や其の缺陷、矛盾等との間に存在しう可き直接の關係を究めようと企てるものである。（其の序文）ラスキンの生前に既に著述された W. G. Collingwood の The Life and Work of John Ruskin には著者はラスキンの性格に現はれた諸特徵を蘇格蘭人的にして同時に Jacobite であり又 Highland Celt のあるものを遺傳的又は境遇的に傳へてゐる事を記してゐる。（前揭書第一卷第一章參照）ラスキンの思想なり事業なりと其の境遇との合致を最も痛切に認めるものは同じくラスキン傳の著者である Ashmore Wingate であらう。彼はジョン・ラスキン程その周圍の既存の外界的狀態に負ふ所多い天才は他に少なからうと考へる。彼はラスキンが彼の父の富力に負ふ所多いのを認めて次の如く云ふ『Imagination は安價なものであるが observation は高價なものである。而してラスキンの生涯は勿論 Imagination や Inspiration や eloquence で以つて補はれてゐるが誠に永い一つの observation の生涯であつた』（Life of John Ruskin, pp. 2-3）

此の所論は前述の W. R. Inge がその The Victorian Age の中でラスキン、モリスに就いて述べてゐる所論を想起させる。

『恐かしくも資本主義と呼ばれた、インダストリアリズムを改造し又は廢滅せしめんとする問題は未解決のまゝに殘つた。ラスキン自身の藝術的生活も彼の親のシェリー酒や之れを愛飲した富豪が存在しなかつたらば恐らく之れを營む事が不可能であつたらう。モリスの巧妙なる製作は絕對的に、彼が非難せる資本家の保護に依賴せるものである。……』（前揭書二二頁）

兎も角も一人の性格、思想に及ぼす外界の勢力が影響する作用は決して單純なものではない。併し茲に於いては境遇論を研究する場合でない。ジョン・ラスキンが如何にその幼時の境遇に支配せられたか又は其の後に於いては H. T. Cook の認めてゐる樣にあれ程當時傑出してゐた友人を澤山有しながら其の間にあつて殆ど等閑視む可き影響を受けずに如何に獨自の存在を示してゐたかは彼の傳記に就いて語る內に分明されるであらう。

從つて Cook はラスキンの生涯は私人的な且つ孤獨な生活であつて周圍の人々との公の交渉に就いては殆と記す可きものを有たぬ「一つの魂」の記錄に過ぎないと述べてゐる。（The Life of Ruskin. Cf. Introductory.）

ラスキンの生涯は彼自身も、述べてゐる樣に「徹頭徹尾、文筆的の」生涯であつた。故に彼の論ずる所は極めて廣汎であり社會的なものであつたが彼の生涯には社會的關係を持つた事件は現はれて來ない。公的生活――多くの民衆の眼に興味を以つて映ずる性質の生活はラスキン自から記錄する價値のない事を述べてゐる。（Cook 氏の引用、前揭書參照）故にラスキンの傳記は

ラスキンの私的生活の記錄に止まり『彼の性質や精神の發展及び彼の氣質、並びに是等のものが外界の意思（world will）と如何に交渉したかと云ふ事が彼の傳記の重なる一主題となつてゐる』(Cook-ibid. vol. I. p. xix.)

然し彼の生涯に就いて知るには彼自身極めて腹藏なく其の材料を提供してゐる。Cook 氏は『書翰、日記、又斷片的ではあるがその自叙傳に於いて或は他の彼の著作の多くの頁に於いて彼は極めて內密なる材料を殘した』(前揭書) Collingwood も同樣な見解を述べて『吾々は單に自叙傳を有するのみならず又多くの友人の回想や就中最も重要なものとして古い書翰、手記、文書の形式に於いて其の當時の實際の俤を持つてゐる、此の最後のものによつては吾々は年を追ふて――多くの期間に於いては殆ど日を追ふて此の少年の精神的發育の跡を辿ることが出來る。』(Collingwood, ibid., pp. 14-15) 試みに Cook 氏のラスキン傳の最初の數章を讀む者はラスキンが如何に各方面の彼の著作に於いて自己の生活に就いて啓示してゐるかを Cook 氏の該博なる引用によつて認め得るであらう。ラスキン全集の Library edition は實に E. T. Cook 氏の努力に依るものであるが氏はその著のラスキン傳の序文に於いて聊かラスキン研究者或はその傳記作者としての權威ある資格を吾々をして認めさせてゐる。筆者も彼の權威を認めつゝラスキンの傳記を述べるに當つて彼に極めて多くを負ふものである。以下直にラスキンの生涯を傳へようと思ふ。

三

傳記を書く企の最初に其の人の家系又は家名の穿鑿を行ふを普通とする。併し其は多くの場合に極めて困難であると共に筆者の如き表題の下に人の生涯を研究する者にとつては比較的に興味の薄いものである。E. T. Cook 氏もそのラスキン傳に於いてはラスキンの祖先、家名の問題に深く關係しないで簡單に記錄しながら更に進んでは彼の Library Edition 第三十五卷の緒言 (Introductory－第三十五卷はラスキンの自叙傳 Prœteria and Dilecta である) に就いて參考すべきを示すに止まつてゐる。Collingwood もその The Life and Work of John Ruskin の第一編第一章に於いては「一七八〇－一八一九」の期間を取扱ひ其の以前のことに關しては三、四頁を費してゐるに過ぎない。茲に一七八〇年と云ふのはジョン・ラスキン（本稿の主人公である）の祖父即ち Edinburgh のラスキン (John Thomas Ruskin) の結婚に就いての記錄ある年である。Cook 氏はこの Edinburgh のラスキンを John Thomas Ruskin of Edinburgh (1761-18 18 [?]) としてあるが Collingwood には之のラスキンが單に John Ruskin of Edinburgh (about 1760-1812 [?]) となつてゐる。John Ruskin の名は Cook 氏に從へば Edinburgh のラスキンの父（一七三二－一七八〇）の名であつて家系圖（註1）には John Ruskin, bapt. April 9, 1732, O. S. Described in 1776 as of the parish of St. Bartholomend the Great, London. とある。而してこのジョン・ラスキンに就いては餘り知られてゐないが彼が Londoner であつた事は London の St. Bartholomew the Great のジョン・ラスキンの子 John Thomas Ruskin が葡萄酒商の Robert Walker の店に傭はれた一七七六年二月十六日附の奉公の契約書によつて明かである。(Cook's Library edition vol. xxxxv. Introductory, lix) 故にラスキン自身が屢々自から蘇格蘭の出であると云つてるのは極めて臆斷であると

(Cook-The Life of Ruskin. vol. I. pp. 3-4)

Edinburgh のラスキン (John Thomas) に就いては可なり知られてゐる。彼が Catherine Tweddale と駈落をして Edinburgh に落ち着いた事は孫のジョン・ラスキンがその自叙傳の中で述べてゐる。(Præterita, § 69) ジョン・トーマスは Edinburgh の商人であつて (Collingwood に從へば葡萄酒商であるが Cook 氏は父のジョン・ラスキンはロンドンの葡萄酒商であつたが之のジョン・トーマスの商賣に就いてはラスキン傳の中には明確に書いてない、唯 Library edition の第三十五卷の緒言には grocer として身を立てたと記してゐる) 相當の社會的地位を占めてゐた。(Collingwood はそれに就いて upper middle class としてゐるし Cook 氏は彼等は終りには教養ある社交界に出入する樣になり當時著名な Thomas Brown 教授と親交を結んでゐたと記してゐる。前掲書) 併しこのジョン・トーマスは安定を缺いた氣質の人として知られてゐて、その晩年には彼の行動、健康及び精神狀態が家の者の心配の種となつた。其の頃既に Perth の Bower's Well に移つてゐたが彼は其處で遂に自殺し彼の子ジョン・ジェームス・ラスキンに此の苦しき記憶と負債とを殘して行つた。(Cook's Life p. 4.)

註一、ラスキン家の系圖に就いては Collingwood のラスキン傳の第八頁と Cook 氏の Library Edition vol. xxxv. の六〇三頁に精密なる系圖が載せてある。勿論後者の方がより精細である。何ずれが正確であるかは筆者は之れを比較する餘裕と資料とを有たぬ。たゞ既にのべた通り本篇の主人公である John Ruskin の祖父の名に就いて兩者に相違があり筆者は Cook 氏の擧げた所の資料によつて同氏の記述をそのまゝ用ひた。Collingwood の著書は一八九三年の出版である(一八九二年十月の序文付き) Cook 氏は其の著の序文に就いて Collingwood の同書を彼の Ruskin's Relics と共に最も權威あるものとしてゐるが是等の相違點に關して如何に見るやは遺憾ながら筆者の盡し得ぬ所である。たゞ Collingwood の家系圖中 John James Ruskin の姉即ちジョン・ラスキンの伯母 (Perth の伯母) Jessie Ruskin (Mrs. Richardson of Bridgend, Perth) の死亡した年が一八二一年になつてゐるのは明かに二十八年の誤りであつて同著二十八頁には一八二八年のラスキン一家の旅行が此の伯母の死去の報によつて Plymouth でやめられたと載せてある。併し此の點は Cook 氏の系圖に於いては二十九年となつてゐる。然し之れは後者の誤りである。ラスキン自身はその伯母の死を Plymouth で聞いた事を自叙傳の中に述べてはゐるが (Præterita, chap. iv. § 78) 其處には年代を明記しないで第七十七節で「八、九才の頃」と云つてゐるのが其の大體を示してゐる。併し Cook 氏は Library edition の第三十九卷 General Index 中 John Ruskin の項目の傳記年表中一八二八年――……「蘇格蘭の伯母の死」と云ふ記錄を見出しうる(同卷四六六頁)系圖中の二十九年は恐らく誤りであらう。

四

Edinburgh のラスキンには二人の子供があつた。一人は女で Jessie と云ひ Perth の鞣皮工 Peter Richardson の所へ嫁いだ。男の John James は姉よりも四年遲れて一七八五年五月の十日に生れた。

ジョン・ジェームスは Dr. Adam の校長であつた Edinburgh の High School で舊式な古典的教育を受けた。彼が十七歳にならぬ内ち姉の Jessie が前記の所へ嫁いだので彼の從姉にあたる Margaret Cox が來て家政を執る事となつた。Margaret Cox は Edinburgh のラスキン(ジョン・トーマス) の姉である Margaret Ruskin と Captain Cox との間に出來た子供である。Captain Cox は Yarmouth から鯨の漁獲に出掛けて行つた船乘りで、ジョン・ラスキンは彼の自叙傳の中に彼の事を記してゐる。(プレテリタ、第一章八節以下參照) 彼は三十二歳で馬に乘つて Croydon に入る際に怪我をして死んだ。Mrs. Cox は Croydon の Market Street に Old King's Head と云ふ宿屋を營んでゐた。彼女のも一人の娘 (Margaret Cox の妹) Bridget Cox は同所

の同じく Richardson と云ふ麵麭屋に嫁いだ。之がジョン・ラスキンの Croydon の叔母である。Margaret Cox が Edinburgh の叔父の家に來た時は二十歳頃であつた。Collingwood は彼女に就いて次の如く云ふ。

『彼女は Croydon の學校の模範的生徒であつた。この脊の高い、美しいそして信心深くもあり又實際的でもあつた彼女は正に、黑眼勝ちの活潑な、そしてロマンティックな青年の Confidante となり助言者となり彼を保護する angel となる可き娘であつた。（ラスキン傳、九頁）

ジョン・ラスキンも彼の母となつたこの Margaret Cok 並びに叔母に就いて書いてゐる（前掲、自叙傳、第一章、八—九節參照）

ジョン・ジュームス・ラスキンは一八〇七年頃 High School を終へてロンドンに出世の緒を探しに出掛けた。彼の父の友人であつた Dr. Thomas Brown は彼の才能を認めて彼にラテンの研究を徹底させ經濟學を勉強する事を書面を以つて勸めた。併し彼は Gordon, Murply & Co. の書記に就職してこゝで友人と彼の成功の基礎とを握る事が出來た。蓋し茲で彼は西班牙の葡萄園の所有者であつた Peter Domecq 氏と知合になり後者はジョン・ジュームスの才能を認めて彼に彼のロンドン支店の支配を委ねた　即一八〇九年の頃彼等の協力で一組合營業が Ruskin, Telford & Domecq の名の下に出來上つたのである。（Collingwood—Life and Work of John Ruskin pp. 9-10）（ラスキンは自叙傳に於いて可なり詳細にのべてゐる。—プレテリタ、第一章二十四節以下參照、Domecq 及び Telford の兩氏に就いては更に興味のある記錄を後に見出すであらう）

ジョン・ジュームス・ラスキンは Edinburgh に歸省した。此の時從姉の Margaret Cox との間に婚約が成立した。それはジョン・ジュームスが確乎たる自己の地位を占める迄結婚を延ばす事に決定した爲めであつて彼は茲に於いて新商會の事業に懸命の努力を盡した。併し一方 Edinburgh では父、ジョン・トーマスは彼の健康や生活が漸次惡くなつて行つて既に述べた樣に Perth に移つた後不幸な晩年を終へた。然もその上に莫大な負債を殘したのを家の名譽を氣にしたジョン・ジュームスは先づ其の返却に力めた。之れに就いてジョン・ラスキンは次の如く書いてゐる。

『私の父は少しの資本もなく然も私の祖父によつて父に遺された莫大の負債を負ひ乍ら葡萄酒商として仕事を始めた。父は此の遺產を受けて自分の爲めに貯へる以前に全部この負債を支拂つた。——之れに對して父の親友達は馬鹿だと云つた。私は父の賢恐に關しては何等意見を述べずに——斯樣な事柄に於いては父の賢恐は少くとも私自身のと同等だとは知つてゐるが——父の墓穴を覆ふ花崗岩の石板に父は「全く正直な商人」であつたと書いた。』（Praeterita, chap. I § 5. Ada Earland の Ruskin and his Circle の書き出しはこのラスキンの書いた父の墓誌を以つて始まつてゐる）

かくて負債は返濟された。併し其れはジョン・ジュームス・ラスキンに健康の犧牲を支拂はしめ同時に心配性や煩さい些事拘泥（toilsome minuteness）の習慣をつけてしまつた。（Collingwood 一〇頁）が同時に Margaret Cox との間の九年の長さに及んだ婚約期も靜かな殆ど秘密に似た結婚式によつて終を告げ新しき夫婦はロンドンの Brunswick Square の Hunter Street の五十四號に居を構へた。

彼等の結婚に就いて Ada Earland は云ふ『其は双方の尊敬と愛情とに基いた結婚である。其の結婚生活は靜穩にして無事であつた。荒々しい言葉の喧嘩や苦々しい感情によつて亂される事はなかつた。夫の方の撰擇は平靜に、何等情熱に驅られる事なくして行はれた。若し妻の側により深い愛著があつたとしても彼女は其れを外部に現はす樣な女ではなかつた。』(Ruskin and his Circle p. 14.)

彼等の結婚の翌年一八一九年二月八日にその長子であり又獨り子であるジョン・ラスキンが生れた。

以下吾々はジョン・ラスキンの生涯を長く辿つて行かうと思ふ。(未完)

「政治的正義」と「人口論」

津田誠一

一

洵にダヂッド、ヒユームの所言の如くライン河は北流しローヌ河は南行すと雖、水の低きに趣くと云ふ原理は一である。其環境異るに從ひ其方向相反するも、兩者を律する法則に二致有るわけでは無い。正統派經濟學樹立前後大動搖の過渡期に於て、民心の歸嚮に簡明なる指針を與ふ可く現前せるは、功利主義哲學換言すれば最大多數の最大幸福を以て、道德の理想善惡の標準と觀る思想である。然るに當時等しく此功利の原理に立脚し乍ら、其人性觀に霄壤の杆格を存せる爲め、一は社會革命を高調し、他は現存制度を謳歌し、相背反せる兩極に走つて啻に相互の應酬に止まらず、其周圍に囂々たる論爭を捲起せるはWilliam Godwin と Thomas Malthus である。而して此兩者の葛藤は、取りも直さず現代に於て社會問題上相拮抗せる二傾向を代表せるものである。蓋し功利主義哲學は既に嚴正なる純理論的檢討を經て、倫理學上其根據を失墜せるも、尙最大多數の最大幸福なる觀念が政治的社會的理想として、依然現代に傳承せらるゝは明白である。然も前世紀に於る經濟事情の劃期的進展は、先にマルサス以來此功利の原理に依つて擁護せられて來た正統派經濟學を、今又ゴドヰンの思想を復活し同じ功利の原理に依つて、破綻に導く傾向を示唆するに至つた。

爰にマルサス「人口論」を圍る時人並に後人の論議の中に、這個の消息を看取せんとするのが本稿の趣意で有る。

固より人口過增の傾向を云爲して、地上に蟠蹠する一切諸惡の根蔕と思惟せるは、必ずしもマルサスに濫觴を發せるにあらず、既に彼れ自らが其「人口論」第二版の序言に於て數名の先哲を列擧し、明に先蹤の存在並に其啓示を承認してゐる。然るに彼等の文獻に關せず、人口法則が專らマルサスの名に於て記憶せらるゝ所以は奈邊に存する乎。

第一にマルサスの「人口論」は其論旨は暫く措き、其表現の態樣に於て遙に前人に冠絕してゐる。彼は先哲攻究の不備を論じて云ふ、「啻に人口增殖と食糧增加の比較に關して、何人も充分精細なる叙述を爲さぬのみならず、該問題中の最も微妙なる、且つ興味有る部分が全然閑却せらるゝか、或は極めて輕々に取扱はれてゐる。即ち人口が常に生存資料の水準に控制せらる可き事理は明白に演述し乍ら、此平均作用を惹起する各種の樣式に關しては、殆ど何等の研究も